様式Ｆ－１９

# 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　3 日現在

機関番号：３３９０２
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2011～2012
課題番号：２３７２０１５２
研究課題名（和文）　リージェンツ・パークの成立過程を通してみる 19 世紀英国都市公園の発展
研究課題名（英文）　The Emergence of Public Parks in Nineteenth-Century Britain through the Development of Regent’s Park
研究代表者
芝　奈穂（SHIBA NAHO）
愛知学院大学・文学部・准教授
研究者番号：８０５５２３１４

研究成果の概要（和文）：本研究では、リージェンツ・パークの成立過程を調査し、19 世紀英国都市公園の発展を考察した。その結果、本公園は、計画初期段階では、王室による不動産経営という側面が強く、19 世紀後半においても、敷地内に設置された動物園や植物園の存在から明らかなように、富裕層への娯楽提供という側面が顕著であったことが判明した。19 世紀を通して、完全に「公園」と呼ぶには限定的と言わざる得ない複合的な空間であったことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study examines the establishment of Regent’s Park within the development of the public park movement in nineteenth-century Britain. The park was established as a Crown’s property venture with a view to offering entertainment for upper and middle classes in London. Within this context, London Zoological Society and Royal Botanic Society were allowed to locate their gardens within the new park. It was a long time before it was opened to all people, regardless of class.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 交付決定額 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：公園、近代都市計画、ロンドン

## １．研究開始当初の背景

現在、「公園」なるものは、世界のあらゆる場所に存在するが、それらが 19 世紀の都市化を背景に英国で誕生し、世界に広まっていったことはあまり知られていない。都市化のプロセスとその社会的影響を探究することは、都市史の分野においても、また、そのような都市部での生活を描いたヴィクトリア朝文学においても重要である。

しかし、「公園」に関しては、従来、その注目度は低く、Hazel Conway による *People’s Parks* (1991)によって、初めて社会との関係で論じられたと言っても過言ではない。関心の低さの一因として、「公園」が「庭園」と混同されて論じられて来たことが考えられる。「公園」(public parks) とは、その名が示すとおり、階級で差別されることなく、万人が利用できる空間のことであり、歴史的には、特権階級のものであった「庭園」（private gardens）と区別されるべきものである。しかし、18 世紀に流行した「風景式庭園」や、現代のイングリッシュ・ガーデンブームに顕著なように、英国文化においては「庭園」への関心が高かったゆえに、「公園」についてはあまり論じられてこなかったとも言える。

近年、環境問題への関心から、Peter Clark 編著の *The European City and Green Space*

(2006)に見られるように、「緑地」(green open space) という枠組みの中で、「公園」が漸く取り上げられるようになってきた。そもそも「公園」とは、工業化・都市化を世界のどの国よりも早く経験したヴィクトリア朝英国において、環境悪化と労働者たちの劣悪な生活環境といった問題に対処するために誕生し、ヨーロッパ、アメリカ、日本を含め、世界中に広まったものである。このように、19世紀における公園の創出は、現代にも通じる根源的なテーマであると言える。

研究代表者芝は、イギリス文化を専門とし、19 世紀英国における公園の誕生を様々な角度から考察してきた。そこから、地方自治体設置による公園をその起源とするものや、英国各地で発達した「植物園」を母体とするものがあったことが明らかになった。

しかし、研究を進めて行く上で、もう一つの起源として、「王立公園」(royal parks) を無視することはできないことが判然としてきた。「王立公園」とは、かつて、王室が所有していた狩猟場や農地であったものが、一般人に開放されたものである。ロンドンには６つの王立公園があるが、その中でも 19 世紀都市公園成立の先駆的存在であったリージェンツ・パークに焦点を当て、王室領地がいかなる経緯を経て、あらゆる階級に開かれた万人の利用することができる「公園」となったのかを追究したいと考え、本研究の立案に至った。

## ２．研究の目的

本研究は、リージェンツ・パークの成立過程の調査を通して、19世紀英国都市公園の発祥を考察することを目的とした。500エーカー（皇居の約1.8倍）もの面積を持つロンドン最大の公園であり、現在、ローズ・ガーデン、運河、湖、ロンドン動物園および様々なスポーツ施設を有し、ピクチャレスクな風景でも有名である。

当該公園は、1811 年、摂政皇太子（後のジョージ４世）によって、ロンドン中心部開発の一環として計画された。設計者は著名な建築家、ジョン・ナッシュ（John Nash）である。彼のコンセプトは、一つに、ロンドン北部の王室領地に田園風景を取り入れた広大な公園を造り、その周縁や内部に、皇太子や貴族のための邸宅（テラスやヴィラ）を建設すること、二つに、新設公園とバッキンガム宮殿のあるロンドン中心部を、リージェント・ストリートで結ぶという瀟洒な都市づくりにあった。

当初の計画から察するに、本公園建設の目的は特権階級のための施設整備という意味合いが強かったと言えるだろう。本公園の一般への開放がなかなか進まず、完全に公開されたのは 19 世紀半ばから後半にかけてであったという点からもそれは明らかである。

このように、当初は貴族や上流階級のための空間が、いかにして一般人が利用できる公共オープンスペースとなったのかについて考察した。また、本公園における設立パターンが、19 世紀英国における公園誕生の一つの起源として、いかにその後の公園発展に影響を与えたのかについても考察を加えることとした。

## ３．研究の方法

本公園形成のプロセスを考察するために、リージェンツ・パーク関連の一次史料を中心に収集し、精読・分析を行った。最もまとまった形の史料は、英国国立公文書館所蔵の王立公園関係書類である。その中から、リージェンツ・パーク関連の政府文書、王立委員会文書、ナッシュによる設計図・報告書・手紙、公園地図や図版等を抜粋し、整理した。また、本公園が誕生した社会的文化的コンテクストについての理解を深めるため、大英図書館において当時の植物学・園芸・造園・建築関係のジャーナルを参照した。さらに、ウェストミンスター市文書館では、政府各種委員会文書および王立植物学協会文書の収集を行った。現地調査において収集した史料のほとんどがマニュスクリプトであり、膨大な量に上ったため、史料の読解に重点を置いた。

## ４．研究成果

(1)当該公園計画と同時期に計画されたリージェント・ストリート建設は、ともに 19 世紀前半におけるロンドンの中心部改造計画(都市計画)の骨子をなしているが、当初、重視されたのは、公園計画の方であり、ナッシュによる計画以前に林野庁の測量監督であった John Fordyce によって提唱された。

18 世紀後半には、王室所有地の効率的経営に関する議論が行われるようになったが、その際に重視されたのが、ロンドン北部にあった 500 エーカー以上の広大な王室領である。Marylebone Park と呼ばれるこの王室領は、後にリージェンツ・パークとして改良されることになる領地であったが、長い間、近隣のポートランド公爵家に貸し出されていた。その貸借期限が 1811 年に切れるのを見越して、Fordyce は、この領地を貴族や上流階級のための高級住宅地として開発し、そこからあがる賃貸料によって王室の収益増加を図ることを提案した。彼は、この不動産経営を有利に運ぶために、敷地全体にピクチャレスクな庭園を施し、美しい風景造りを行うこと、さらに、ロンドン中心地と大通りで結んでアクセスを整えることを提唱した（“The First

Report of the Surveyor General of His Majesty's Land Revenue,"1797)。前者が後にリージェンツ・パークと呼ばれるようになるものであり、後者がリージェント・ストリートとなるものである。

このように、本公園建設には王室による不動産経営という大きな目的があったことが判明した。また、従来の研究においては、近代都市計画の萌芽としてリージェント・ストリート計画の方が重視されてきたが、当初の目的においては、パーク計画に重点が置かれていたことも明らかとなった。公園によって付加価値をつけ、近隣の不動産価値を上げるという手法は、その後、19世紀英国における公園の発展に大きな影響を与えることになった。19世紀後半に各地で建設された公園は、リージェンツ・パークの例に則って、周囲に住宅地を配置することが多かった。すなわち、公園によって近隣の地価価値が上昇するため、住宅地の売却による収益を見込むことができ、それを公園建設費に当てたのである。

(2)王室による不動産経営という意図を持った本公園の設計には、地主貴族による伝統的なエステート経営(不動産経営)の手法が活かされていることも明らかとなった。もともとロンドンのウェストエンド一体は、貴族等の大地主による土地経営が行われてきたが、現在までその伝統は存続している。大地主たちは、「エステート」と呼ばれる自分たちの所有する土地を賃貸に出すことで、さらなる利益と権利を獲得してきたのである。このような土地開発においては、地域全体の町並みが地価に影響を与えることから、大地主たちが、町づくりに力を注いできた。すなわち、統一感を持った外観を持つ住宅建設、道路計画、教会や市場建設、下水道整備、広場や庭園整備などが行われていた(Donald Olsen, *Town Planning in London*; 鈴木博之『ロンドン』)。

現在、商業娯楽施設として有名なコヴェント・ガーデンも、1630年代にベッドフォード公爵家によって計画されたエステート開発にその起源がある。公爵家は、エステートを住宅地として開発するため、長方形の大広場を設計し、その回りに賃貸用住宅棟を建設したのである。この「スクエアー」と呼ばれる広場は、その後のロンドンにおける大地主による「エステート経営」に必須の要素となるものであった。樹木や草花の伴ったスクエアーは、その周囲に巡らした賃貸用高級住宅の住人だけが入ることができる特権的空間であり、住宅地の価値を高めるものであった。したがって、王室による不動産経営の一環として計画されたリージェンツ・パーク建設も、周囲の住宅地に付加価値を付けるための「スクエアー」の役割を果たしたと考えることができるのである(Henry Lawrence, *City Trees*)。

(3)リージェント・ストリート建設は、前述のとおり、当初、伝統的なエステート経営方法に従い、公園計画に付随して計画されたものであった。しかし、ナッシュが、それを壮麗な都市造りへと発展させた点は重要である。それにより、ストリート計画は、パーク計画の付属物ではなく、近代都市計画の先駆けとみなされるようになったからである。

本計画の概要は、これまで類を見ない「主要幹線道路」を計画し、それを豪華なショッピング・ストリートとするアイデアであった。従来の研究では、本ストリートの「主要幹線道路」としての性質にのみ焦点が当てられてきた。本ストリートが、現在もロンドン一の目抜き通りとして繁栄していることを考えれば、「主要幹線道路」としての視点は妥当性がある。

しかし、Hobhouseも指摘するように、ナッシュは、本ストリートをパークと中心地を結ぶ幹線道路としただけでなく、ショッピング・ストリートとしたことが後への影響という点で重要であると言える(Hermione Hobhouse, *Regent Street*)。というのも、本ストリートは、華やかなショッピング街として、壮麗な都市景観の一部を構成しながら、上流階級のための娯楽空間として発展するに至ったからである。

(4)パーク計画、ストリート計画の両方に関して、従来、ナッシュ個人の功績に焦点が当てられてきたが、ナッシュ以外にも、Decimus BurtonやC. R. Cockrell等、多くの建築家や投機的建設業者たちが参画していたことが明らかとなった。

(5)完成後の公園がいかなるスペースであったかを考察するために、1828年に動物学会によって設置されたロンドン動物園と1838年に王立植物学協会によって建設された植物園についても調査を行った。前者は現在も公園内の同じ場所で存続しているが、後者は20世紀前半において解体され、その歴史についての本格的な研究はこれまでされてこなかった。

公園設計当初には予定されていなかった動物園と植物園が、本公園内に設置されたのは、本公園がロンドン中心部に近く、ピクチャレスクな風景美を持った高級エリアとしての地位を確立していたからである。動物学会も王立植物学協会も、それぞれの名声と収入を確保するため、そのようなハイクラスなエリアに学会を代表する施設を設置したと考えることができる。動物園も植物園もいずれも、会員とその家族のみに入園が許された

中流階級以上を対象とした排他的な施設であった。
　植物園には、1840 年代後半に巨大温室も建造されたが、これも、会員しか入場できないものであり、19 世紀にはロンドン上流・中流階級の娯楽空間であった。（なお、この点に関して、学会発表を行った）。
　公園内におけるこれら排他的な施設の存在は、たびたび世論のやり玉に上がることになり、公園の完全開放の動きにある程度の影響を与えることとなったが、これらの施設の階級的排他性は長い間存在した。

(6)一般への開放については、開園後、段階を踏んで徐々に行われて行った。しかし、計画初期段階においては、王室による不動産経営という側面が強く、また、19 世紀半ばから後半にかけても、敷地内に設置された動物園や植物園の存在から明らかなように、中流階級以上の富裕層への娯楽提供という側面が顕著であることが判明した。19 世紀を通して、完全に「公園」と呼ぶにはまだまだ限定的と言わざる得ない複合的な空間であり、完全開放までには長い時間がかかったことが結論として導き出された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
<u>芝　奈穂</u>、「19 世紀イギリスにおける温室の発展」、日本英文学会 第 64 回中部支部大会、2012 年 10 月 27 日、南山大学

６．研究組織
(1)研究代表者
　芝　奈穂（SHIBA NAHO）
　愛知学院大学・文学部・准教授
　研究者番号：80552314